彙報

護　雅夫先生を偲んで

梅村　坦

護雅夫先生の、学問に捧げられた生涯に終止符がうたれてしまった。一九九六年一二月二三日に逝かれた。何回も大病に見舞われて手術をかさねられたとはいえ、いささか早すぎたと痛切に感じる。追悼文が、すでにいくつか発表されつつある。生前の学問業績はもちろんのこととして[1]、各方面での活躍の足跡も、それぞれの立場から語られることと思う。ここでは、いささか個人的な思い出をふくめて、幅広い先生の活動の諸側面をふりかえり、追悼の文としたい。

先生は、滋賀県長浜町（現長浜市）の浄土真宗の寺に生まれ、聖徳幼稚園、長浜尋常高等小学校、虎姫中学（現虎姫高校）と、地元で初等中等教育をうけられたのち、京都の第三高等学校文科甲類に進まれた。東京帝国大学文学部東洋史学科に入学されたのは、太平洋戦争のはじまろうとする一九四一（昭和一六）年のことであった。高等学校時代の安部健夫、大学の和田清といった師の影響で、アジア遊牧民の歴史の研究を志されるようになったと自ら述べておられる。

先生の学問・教育活動の場は、江田島の海軍兵学校からはじまったが、それはいわば強制の時代であった。そのころのことと、戦後の東京帝国大学大学院に復帰されてから学問に情熱を燃やされた時期については、『戦中戦後に青春を生きて――東大東洋史同期生の記録』（山川出版社、一九八四年）のなかの先生の「海軍兵学校・研究室・みづほ館」に、活写されている。また、第三高等学校時代からはじまる先生の学問青春記「わたしのテュルク（トルコ）学事始め」（『トルコ文化研究』七、一九九四年）というインタビュー記事では、先生が洒脱な語り口調で、学問の道に進みつつある時代の話を目の前でされている様が再現されている。この記事は、亡くなる半年前に先生みずからの手で書き直されて、『古代トルコ民族史研究』Ⅲ（山川出版社、一九九七年）の「序文に代えて」にまとめられた。同書は、日本学士院賞を受けたⅠ（一九六七年刊）と、続編のⅡ（一九九二年刊）につづくもので、この三冊が、先生の古代トルコ民族史関係の日本語による主要論文の集成

である。先生最後の著書である第Ⅲ巻の別冊には、活字となった先生の全業績を網羅的に掲載した著作目録（片山章雄編）がふくまれ、おのずから先生の学問の偉大な足跡を詳しくたどることができる。

一九四八年から北海道大学に奉職、一九五六年には東京大学に移られ、一九八一年に定年退職後は、一九九一年まで日本大学で教鞭をとられ、その前後、多くの学会や研究機関の運営に携わられた。

日本の内陸アジア史学、トルコ学、とりわけ突厥史研究の第一人者であった先生は、実はモンゴル研究から出発された。戦時中の混乱で失われてしまった卒業論文の一部、「探馬赤部族」関係の論文二篇が戦前に公表されているし、一九五二年の「Nökör」関係の二論文は、いまでも重要なものである。先生は、その後も中央ユーラシアを舞台とした遊牧民の部族社会構造と歴史的役割を大きな枠組みとしておさえ、その中で、匈奴、突厥そしてウイグルの社会に関する個別研究を強力に推進された。その際、トルコ系民族の系譜や部族の構造などの解明に有益な漢籍資料の厳密な解釈と、碑文・文書研究のレベルの向上をはかる点で、他の追随をゆるさず、多くの創見を示された。その視角のひとつは、はやくから、内外の民俗学の成果をとりいれたことに発している。すなわち、遊牧民の精神性つまりシャマニズムの役割に注目されていたのである。その観点から、日本の巫術や祭、伝統芸能などにも鋭い観察眼をもっておられた。そうした知見の蓄積を、のちに、具体的に古代トルコ語碑文の解釈に生かされた。突厥ルーン文字銘文のなかに、なぜ一人称、二人称のことばが混じるのか。それを、シャマンの口寄せによるものと結論されたのである。フィロロジストとして文献資料を徹底的に分析し、みごとに遊牧民社会の人間精神の中に位置づけた大きな成果である。

一方、一九六〇年代初期には、ウイグル文書研究の成果を集中して発表された。

ヨーロッパの成果をいちはやく消化しつつ、また先人の業績に訂正をくわえ、当時参照可能な文書群を精査する一方、日本における漢文法律文書研究の到達点に立ちながら、ウイグル文書にたいする漢文文書書式の影響を具体的に明らかにしたことは画期的なことであった。先生の同級生であった故山田信夫先生とともに、日本にウイグル学あり、と世界にむけて発信されたのである。両先生の存命中に若い世代をふくめ、日本にはウイグル文書に直接関係する研究者が両手の指をもって数えるほどになったことは、世界的にみて希有な事態であった。言語学、仏教学の領域における研究にくわえて、歴史研究者としてウイグル文書類を歴史の史料として扱う方向性と可能性は、両先生によってはじ

めて開かれたといって過言ではない。

先生は、一九五八年のトルコ留学をきっかけとして、西へ拡大したトルコ諸民族のあとを追うかのようにして、イスラーム世界、オスマン帝国、そしてトルコ共和国へとたちまち関心を拡大された。先生の学問の足跡は、まさしくユーラシア史総体のなかで遊牧社会がもっている世界史上の役割にかさなるものであった。そしてトルコ民族史研究のためには現在のトルコ民族を知ること、という、いまではほとんど誰もが志し、当たり前になった手法を、ようやく戦後の混乱から脱しかけた当時に実践にうつされたのである。けっして文献のみに埋もれずに、実際の言語、生活感覚を手のうちにされたかったのではないかと、その動機を推察する。当時、内陸アジアのトルコ族社会に留学に行く術はまったくなかった。そのことが、おそらく先生をトルコ共和国に誘い、それは、現在のトルコと日本との学術・教育の交流の土台を築く活動にもつながっていった。トルコ留学を終えて以後も、何度もトルコを訪問された。一九七六年から翌年までの一年間はイスタンブル大学の客員教授として滞在され、また一九八二年には、テヘランから撤退した日本学術振興会の「西アジア地域研究センター」を再建するためにアンカラに滞在された。その先鋒として、私が派遣されていたが、私はとりあえず「看板」を掲げただけで、ほとんどお役にたてなかったように思う。先生なしには事ははこばなかったのである。このセンターは、いまはカイロに置かれている。いずれにしても、トルコ研究、西アジア研究のために留学する日本人は今ではひきをきらないが、その道をつけ、広げられたのも先生だったのである。さらに一九八六年から一年間、アンカラ大学客員教授として赴かれ、日本学講座の設立に尽力された。先生による、トルコやソ連における研究の紹介と批判は、中央ユーラシア研究に欠かすことのできない貴重なものばかりであり、この点でも先生の学界への寄与は忘れてはならないものであろう。

このような先生の学問に、直接、間接に導かれた者たちの研究領域は、古代から現代にいたる中央ユーラシアと西アジアの地域を覆い、歴史学はもちろん、考古学から文献学、仏教学、音楽などの分野にまでおよぶ。そのことは、先生の東京大学定年退官を記念して企画され、三九名の論文を集めて先生自身が編まれた『内陸アジア・西アジアの社会と文化』（山川出版社、一九八三年）の巨冊に象徴されている。この書物の「はしがき」に、先生は、ご自身のことをふくめて、戦後の日本における内陸アジア・西アジア研究の足跡を回顧され、東京の前田直典氏を中心とする研究会活動、東洋文庫の書籍収集のこと、「野尻湖クリル

タイ」のこと、その後の「純粋若手」の研究会のことなどを述べられたあと、「本書は、上述した戦後における各世代の研究者のうち、主として、第一世代から第三世代にいたる人びとによる研究成果の一端をふくんでいる」と書かれ、また「本書は、（中略）戦後、我国で育ってきた内陸アジア・西アジア研究者の現時点における研究水準を示している。このような研究書が、従来、我国で出版されたことはない」とも書かれた。いま、これをあらためて読んでみると、この文章には、トルコ民族を軸に、内陸アジアと西アジアというふたつの世界を自然の流れとしてひとつに結びつけた先生の、ひそかな自負をみることができるのではないかと思う。そして、先生を戦後の第一世代とすれば、いまや着実に第四の世代が育ちつつあるといってよく、その動向を先生はよく承知しておられた。つねに若手研究者の活動に暖かい視線を注がれていたのである。

先生の築かれた学問と教育への広い視野は、野尻湖クリルタイによって支えられていた面がある。これは山田信夫、神田信夫、池上二良、萩原淳平、それに護先生が発起人となって「若手アルタイ学者の集まり」として一九六四年に発足した。第二回と第三回は「若手アルタイ学・中央アジア研究者集会」とされ、第四回から野尻湖クリルタイと称されるようになったものである。その所属をこえ、専攻分野のいかんを問わず、ただおおまかにいって、アルタイ学・内陸アジアつまり、いまでいえば中央ユーラシアに関係する地域のことを研究し、あるいは研究しようとしている人の年に一度の集まりである。いまでも続くクリルタイでは、固有の関心の披瀝と語り合いや、手持ちの情報の交換がなごやかにおこなわれる。そうした雰囲気は、他の学会では味わえないものであり、それは先生たちの世代によってつくられたものである。先生は、自由でおおらかな、世代と分野をこえての交流を楽しまれ、また七月半ばの野尻湖ホテルでの集会の時だけでなく、日常的に実践をされていた。野尻湖クリルタイから派生した「純粋若手」の研究会の発足や活動にも支援を惜しまれなかった。すでに「純粋若手」ではなくなった世代の目からみて、先生の一貫した、その生き方はまさに見習うべき姿勢であった。

ところで、東洋文庫のアラビア語・ペルシア語・トルコ語の書籍収集は、いまも「中央アジア・イスラム研究室」の仕事となっているが、その始まりは一九五八年からである。すでに四〇年におよぼうとするその事業によって、東洋文庫のもつコレクションは膨大なものになりつつある。そのうちのトルコ語の書籍の収集を最初に手がけたのがトルコ留学中の護先生であった。帰国後、先生は東洋文庫の兼任研究員となって、はじまったばかりの現地語資料の収

集の継続やそれを利用しての研究推進に力をそそがれ、一九七二年には総務部長という職務までこなされた。さらに一九七六年からは東洋文庫附置のユネスコ東アジア文化研究センターの副所長、ついで所長をつとめ、東洋文庫の研究部長、理事としても、故榎一雄先生の運営を支えられたのである。最近、東洋文庫は、北村甫理事長、佐藤次高研究部長のもとで、サンクト・ペテルスブルグ東洋学研究所所蔵の中央アジア出土諸言語古文書をマイクロフィルムに保存する計画をスタートさせたが、これに、深い理解と賛同を示されたのは、しごく当然のことであった。病床にその報告に伺ったおりも、たいそう喜ばれていたことを思い出す。

先生の海外活動は、もちろんトルコにとどまるものではなかった。トルコ留学の帰りには、ハンブルグのアンネマリー＝フォン＝ガベン先生のもとで古代トルコ文献学を修め、のちのウイグル文書研究のための基礎を形成された。また、一九六六年にはレニングラード大学の客員教授としてソ連に滞在し、突厥碑文研究と調査をすすめていた東洋学研究所のクリャシュトルヌイ氏らと生涯にわたる親交をむすばれた。最近になって、クリャシュトルヌイ氏やクィチャノフ氏が、何度か来日する機会があったが、先生の病気のために直接会うことができなかったのは惜しまれる。

先生は、一九七七年には、日中文化交流協会の訪中団にくわわって、新疆ウイグル自治区のトゥルファンまで行かれた。いまではほとんど自由に訪問できるようになったが、当時としては画期的なことであり、東洋文庫そのほかの研究会での先生の報告には、多くの聴衆が耳目をそばだてたものである。このほかの機会にも先生はドイツ、ソ連、モンゴル人民共和国などを訪れている。先生のトルコ民族史研究と、文化交流への貢献とは、各国に深い感銘をあたえ、トルコ共和国からは文化功労賞が贈られ、また科学アカデミー（アタテュルク文化センター）のゴールドメダル、トルコ日本友好百年記念ゴールドメダルを授与されたほか、ブルガリア人民共和国建国記念勲章が贈られている。また、滞在したり訪問したりされた国の研究状況などをすぐに紹介しておられたことは、後につづく研究者に寄与することまことに大きいものがあった。これも野尻湖クリルタイの精神にもとづき、海外の研究状況について最新の情報を逐一公開されていったものである。

いくつか先生の人柄をうかがわせるエピソードを紹介して、先生を偲ぶよすがとしたい。一九八七年、アンカラ大学客員教授の任を終えられた帰途、先生は北京に立ち寄られた。重要書類と衣類を入れた鞄が一時ゆくえ不明となり、真面目な先生は非常に心配され、連絡がくるのを待って外

出も控えるほどであった。たまたま滞在中であった私は、慰めにとおもって、市内をご案内したのだが、気もそぞろで、ほとんど覚えておられなかったのではないか。万事に生真面目な、しかしユーモアにあふれる先生の話で有名なのは飛行機に乗った金魚のことである。トルコへ渡るときのこと。誰かに請われるまま、ことわることのできない先生の性格で、本当にビニール袋に金魚を入れて、機内で餌をやり、空気をふきこみ、また南周りのトランジットのたびに水をかえて行かれたというのである。折にふれてこの話をされた先生の声、口ぶり、笑顔は忘れがたい。先生のサービス精神は旺盛であった。放送大学が発足するまえのテレビ試験放映があったころ、原稿と資料の作成や一部の講義をお手伝いしたことがあった。その一五回分におよぶ収録のおり、先生はやわらかな比喩をさかんに連発されたが、それがみな放送コードにかかるということで、何度か言葉を入れ換えたりした。しかし、最後の収録が終わったとき、ときに鬼のようでもあったディレクターが感激して涙していたのである。根が真面目どうしの心の琴線が触れあったかのようであった。

護先生は、若き日に師事したガベン先生を敬愛しておられた。その厳格なフィロロジストとしての側面は、おそらく直伝のものではないかと思う。日頃から、老境に入ったガベン先生に護先生が池での水泳に誘われたこと、ボート漕ぎで負けそうであったことなど近しい交友関係を伺っていた身としては、一九九三年に亡くなったガベン先生の追悼文を書くべき人は、日本では護先生をおいてはいないと考えていた。しかし、護先生の体調は、ついに、それを許さなかった。[2]『古代トルコ民族史研究』Ⅲの刊行が生前に間に合わなかったこととともに、先生がガベン先生のことを文章で振り返ることができなかったのは、残念に思うことのひとつである。

先生を失ったいま、中央ユーラシア世界の歴史を研究するわれわれの世代の責任の重さをひしひしと感じないわけにはいかない。われわれの学生時代はともかくとして、いま、そのころから、私などの押しかけ弟子をふくめた若い世代と席を同じくして語り合うことのお好きだった先生の霊前で、あらためて襟をただしつつ、心からご冥福をお祈りしたい。

註

(1) 先生の学問上の業績については、とくに森安孝夫「護　雅夫博士の訃」『史学雑誌』一〇六―三、一一四～一一七頁、一九九七年を是非とも参照されたい。先生の訃報はトルコにもいちはやく伝えられ、アンカラの言語・

文学雑誌 *Türk Dili* の五四二号（一九九七年二月刊）に掲載された。別に梅村坦「追悼　護　雅夫先生」『内陸アジア史研究』一二や、『東方学』の特集が予定されている。

（2）梅村坦「アンネマリー＝フォン＝ガベン教授（1901.7.4-1993.1.15）」『東洋学報』七七―三・四、八〇―八六頁、一九九六年。